

◆当キャラバンの趣旨と経緯について

「余命1ヶ月の花嫁・乳がん検診キャラバン」は、乳がんのため24歳で亡くなった故・長島千恵さんのメッセージがきっかけで始まりました。そのメッセージとは、「若い人も乳がんになる危険があることを知ってほしい。若い人こそ進行が早いので若い人こそ体に気をつけてほしい」というものでした。

ひとりでも乳がんに苦しむ人をなくしたい、悲しむ家族を減らしたい、そんな長島千恵さんの“祈り”は、多くの視聴者の方々から「番組をきっかけに、乳がんについて知ることができました」と、大きな反響を頂きました。

これらの視聴者の方々からの反響を受け、キャラバンは始まりました。

キャラバンの最大の目的は、千恵さんのメッセージをより多くの方に伝えることです。つまり、「キャラバンを通じて、若い女性にも乳がんについて知ってもらい、乳がんに対する意識を高めることで、自分の体により関心を持ってもらうきっかけ作りを行うこと」なのです。

キャラバンの現場では、乳がんに関する説明VTRを見ていただいたり、看護師による乳がん勉強会を受けていただいたりしながら、乳がんの現状や、検診のメリット・デメリットなどを詳しく説明しています。そして、定期的に自己検診を行うことや、異変を感じた際には躊躇せず専門の医師に相談することの大切さなど、乳がん対策の基礎とも言うべき啓発を行っています。40歳未満の女性は基本的に乳がんを恐れる必要はないものの、小さな異変に気づいた時にすぐに対応できるように、自分の身体と向き合い自分の身体を良く知る意識を持つことが大切であることを、最も強く伝えています。そして、こうした情報提供をした上で、乳がん検査を希望される方に検査機会を提供しています。

当キャラバンは2008年3月、「余命1ヶ月の花嫁」の書籍の収益の寄付先であるNPO法人「J・POSH（日本乳がんピンクリボン運動）」との共同事業としてスタートしました。ご存知のようにJ・POSHは乳腺専門医の田中完児医師が理事長を務め、乳がん啓発に長年取り組んできた方々が中心となってピンクリボン活動に取り組んでおり、特にマンモグラフィによる検査の大切さを啓発しています。私どものキャラバンの運営や検査方法、ホームページに掲載する内容等についてはJ・POSHに全面的な協力をいただきました。

ご指摘の通り、いわゆる集団検診で死亡率を下げる科学的根拠は、特に50歳以上のマンモグラフィにのみ認められていますが、実際の医療現場では何らかの症状を感じたりした際にはマンモグラフィやエコー（超音波）等の検査が行われていることから、こうした機会を設けることは一定の意味があるとの判断から、共同事業において検査機会を提供することとしました。

特に、マンモグラフィ検査については、J・POSH から「マンモグラフィ検査にはエコー（超音波）検査では見つけることが困難な早期乳がんのサインである微細な石灰化など、ミリ単位の触っても判らないような病変を見つけることも可能で、若年性乳がんを念頭に置いて、一度若いうちに受診するのであれば、マンモグラフィ検査を受診することは意味がある」との助言をいただき、私どもがキャラバンの活動の中に取り入れることを決めたものです。

その際、「若年者のマンモグラフィ検査の画像は白く写りがちで、病変の発見が年配の女性に比べて難しい場合がある」「放射線被曝がある」といったデメリットがあることも、私どもも承知しており、こうしたマイナス面も含めて、キャラバンの現場では受診者に詳しく説明し、また、検査を受けても必ずしも乳がんの発見につながらない可能性があることも説明し、その上でなお検査を希望される方に受診をしてもらっているものです。

その結果、最初の1年間にご連絡をいただいただけでも約10人の方の乳がん早期発見につながりました。

ある30代の女性は友人が乳がんになったことがきっかけで、当キャラバンでマンモグラフィ検査を受け、自身も乳がんが見つかりました。部分切除手術を受けたものの、早期での発見だったためすぐに職場復帰もでき、感謝の言葉をいただきました。

J・POSH との共同事業は2008年で終了し、2009年は映画「余命1ヶ月の花嫁」の出資企業の賛同を得て、同様のキャラバンを継続開催しました。2010年はTBS単独でエコー（超音波）検査でのキャラバンを実施しています。マンモグラフィにしてもエコーにしても、それぞれ長所・短所があることを十分認識しており、また活動の中で、キャラバンに参加いただいた全国のさまざまな医療関係の方々の助言、シンポジウム等に関わっていた医療スタッフなどのアドバイスを参考にさせていただいております。私どもは乳がんへの関心を高めるという当初の趣旨のもとに、その方法や手段は柔軟に対応しており、3年目の活動は、エコーによる検査機会を提供することにしました。

エコー検査は先に挙げた微細な石灰化を探知するのは不得意で、検査をする人の技量によって病変を見つかるのに差が出ることがあるといった弱点がありますが、しこりを作るタイプの乳がんについては内容がよくわかることや、痛みを感じないこと、若い女性の場合でも画像がよく見えることなどの利点があり、こうした様々な点を受診者に説明しながら、検査機会を提供しています。また、偽陽性や過剰診断、病変の見落としの可能性もあることも、キャラバン会場にて検査の前に説明しています。また、当キャラバンでは医師に様々な相談ができるブースも設け、検診などに対して不安や質問がある場合には気軽に相談できる態勢をとっています。

私どもがこの活動を始めてみて感じたのは、キャラバンに参加される受診者の多くが、親族や友人に乳がん患者がいたり、気になる症状がありながらも気持ちの面や費用の面からなかなか病院には足を運ばなかったり、といった方々で、何らかの強い動機を持って積極的に参加されていることです。

「母親が乳がん闘っているので、自分も若いうちに一度調べておきたかった」という方、「ずっと気になる症状があるが、なかなか病院に行けなかった。でも長島千恵さんに背中を押してもらってこのキャラバンには来られました」と話す方もいらっしゃいました。

今年から実施しているエコー検査においても、再検査が必要な変異が見つかり、経過観察に入っている女性もいます。これまでのキャラバンの受診者からは、検査機会や乳がんについて様々な現状を知る機会を提供したことを好意的に受け止めてくださったメール等が多く届いています。

検診には様々なリスクはありますが、当キャラバンが、乳がんについて知る機会を設け、症状や不安を感じている方に検査機会を提供したことは、若い世代に乳がんに対する意識をもってもらうことから具体的な乳がん発見に至るまで、一定の意義と成果があったと、私どもは考えております。

(キャラバン事務局に寄せられたメールの一部をご本人の許可を得ましたので引用させていただきます。)

<2009年5月14 受診 35歳 福島県在住>

千恵さん、太郎さん、ご担当者の方々へ

(※事務局注:「太郎さん」とは、長島千恵さんのパートナー赤須太郎さんのことで、キャラバンにはボランティアでずっと参加されています)

このたび、乳がん検診キャラバンに応募し福島で検査を受けさせて頂きました。

応募用紙にも書きましたが、私の母は昨年、乳がんが再発して亡くなりました。

20年以上過ぎてからの再発です。病気になった時は、35歳、子どもが三人いて仕事もする、ごく普通の母でした。母が亡くなったことと、母が罹患した年齢と同じ歳になったこと、それが応募の動機です。私は独身で、自由気ままに過ごしていて正直、あまり体を大事にしていなかったところがあり また、遺伝性のある乳がんに対して「遅かれ早かれ かかるものだ」とあきらめていたところがありました。高い倍率の中、検査を受けさせてもらえたこと本当に運が良かったです。母のおかげかなと思っています。

短い時間でしたが、熱心に丁寧に説明をして下さった太郎さんや、看護師さん、寒い中、お世話を下さったスタッフの方々、検診車で気持ちをほぐしてくれた技師の先生。順番を待つ間、お互いを思いやりながら話をした参加者の方々、そして多分、福島の上から見守っていた千恵さん。みなさまに感謝です。ありがとうございました。

<2010年5月受診 33歳 神奈川県在住>

今年5月にキャラバン検診を受けさせてもらったものです。20代～30代の女性には公的な検診のカバーがやや薄いです。しかも、体自体は健康で、病気など考えられないとても忙しい世代でもあります。女性誌で乳がんについての知識を入れたとしても自分の健康な体と結び付けて考えるとところまではいかない年齢でもあるし、だから、近い世代の女性である千恵さんのお話をきっかけとしてキャラバン検診を受けることが出来たのはとてもありがたかったのです。自分でできる乳がんチェックの検査を看護師さんに医療用ボディを使って教えていただきましたし（雑誌のイラストより格段に分かりやすかったです）この検診をきっかけとしてほしいということや、専門機関への受診もしっかりと受けてくださいね、という説明もありましたし、少なくとも私にとっては無駄な検診ではありませんでした。とても意義ある機会でした。キャラバン検診の活動は、確実に日本の女性の体を守るきっかけとなっていると私は思います。

<2010年7月受診・29歳・大阪府在住>

私は、大阪に住む29歳の女性です。このキャラバンを知って、半年以上前から毎日のように開催決定されるのを毎日のようにチェックして待っていました。大阪市は子宮がんは20歳から（400円）、乳がんは30歳から（1,000円）で検診が受けられるのですが、実は、私は東京生まれの東京育ちで、住民票はまだ東京のままなんです。なので、大阪市の制度を利用することができずにいました。実は、我が家は超がつくほどのガン家系なんです…。祖父が胃がん。母が乳がん。代々ガンにかかっています。本当は私も検診に行くべきなんですけど、どうしても抵抗があって…。一人で行くのも怖いし…。でもいつかは行かないと…。25歳を過ぎたころから、そんなことを考え早4年…。それで友人と何かのきっかけで行ければと思いこのキャラバンに賭けてみました。私のような臆病者もたくさんいると思います。ぜひ、これからも続けていってください。

<2008年3月受診・30代会社員・神奈川県在住>

乳がん検診の応募させていただき、赤坂サカスの検診キャラバンで受けたところ、結果が要精密検査ということで、病院で再検査をした所、細胞診（2回やり）では癌という結果。もう少し詳しく調べるために設備の整った乳腺外科を紹介されて再検査をしたところ、初期の乳がんであることが分かり、範囲は3センチ程あったのですが乳管内にある癌だったため、一部切除と同時再建にて手術前と変わることなく過ごして、今は放射線治療（5週間）と服薬で大丈夫そうです。

早い段階でわかったのは、この検診キャラバンを作ってくださった長島千恵さんのおかげです。そのおかげで、何より手術前と同じ生活を過ごすことができ仕事も辞めずに1ヶ月間の休職で復帰できました。

30代半ばなので乳がん検診補助がなく、なかなか自分から検診を受ける機会を作らずにいましたが、今回応募して本当によかったとそして検診を受ける機会を設けてくださった長島千恵さんに改めてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

また、キャラバンで診察を担当した医師が、実際に現場を見た立場から以下のような感想を寄せてくださいましたので、掲載させていただきます。

＜日本総合健診医学会会員 日本人間ドック学会認定医 日本医師会認定産業医
医師 永久 均＞

50 回目にあたるキャラバンに、一検診医として参加させていただきました。ご依頼を頂いた時は、先の報道などもあり、どんな雰囲気の中での仕事となるのだろうか、神妙な空間の中で緊張漲る仕事となるのだろうか、と予想だにせずにおりましたが、それは全く杞憂に過ぎないことが直ぐに解りました。

受診者の方々におかれましては、入室して席に着いたばかりの時には、さすがに、やや緊張された面持ちの方も少なからずいらっしゃいました。しかし、もともと、自らの身体の状態に関心を抱く方々が、この機会を是非、一つの良き機会と捕えて大切にしようと思われて自発的に足を運ばれた方々です。

受診に先立ち、提出された要望書や報道内容全てを印刷して配布し、運営スタッフが事情を説明、そして、乳腺外科の専門医からなされる、乳がん検診の意義そして、率直な第三者の意見としての「メリット・デメリット」など、何ごとも覆い隠すことなく話される内容に聞き入っているうちに、自ら心が解放されていくようでした。

現場では、「自己触診で胸にしこりを感じる」、「心配だ」、と行って相談に来られた方も数名いらっしゃいました。私は乳がんだけを専門とする医師ではありませんが、同席の専門医と共に行った視触診や説明によって、異常な症状ではない、過度に心配することは無用だということが解かり、「常日頃気になってモヤモヤしていたものから解き放たれた」と相談にいらっしゃった皆さんが、安堵の表情を浮かべる姿をみることは、携わった医師として嬉しく思いました。

また、ボランティアで参加している看護師は、参加した受診者たちに対して「自己触診」の方法を「乳がん模型」を使って時間をかけて説明し、出た質問に対しても、笑顔で丁寧に受け答えをしていました。わきあいあいとした中での仕事。これは、スタッフが皆、亡き千恵さんの友人達、ご親族の方々、キャラバンの趣旨に賛同して自発的に参加・協力したボランティアの方々であることが大きく影響していると思います。それぞれが受け持つ仕事の場で微笑みを絶やすことなく、暖かく受診者を迎え入れていました。

私が通常の業務として関わるがん検診の環境とは、全く異なる雰囲気に包まれていました。家庭的な雰囲気なのです。受診者自身も、心落ち着き、微笑んでいる。私には初めての経験でした。常々、決して慢心してはならないとは意識しているものの、まだまだ勉強不足だと痛感した次第です。背景知識の総見直しもしなければならぬと考えているところです。

検診自体の目的は、あくまで早期発見・早期対処です。しかし、この「キャラバン」の本来の意義は、若いうちから「自分の身体に関心をもつ習慣をつけましょう」というメッセージをなんらの強制もなく、自然に受け入れられる形で発信していることだと感じました。乳がんに留まることなく、他のがん検診、特に若年発症する子宮頸がんに係る検診に対しても同様に意識していただければ、もっと幅広いメッセージも発信されていたはずで

す。

乳がん検診に関わらず、検査の手段が複数ある場合、自らが是とする手法の有効性だけを主張して譲らず、他の手法を排斥する立場をとることは、他の例をとっても医療の現場ではよく目にする光景です。例えば、どの薬剤を選択し、どのような方法で用いるか。検査結果を解析して判定する基準など、医療の現場では様々な場面で見られます。しかし、どの選択であれ、実際に検査の手段、治療の手段として、実際に用いられているのであれば、それぞれの意義は存在するはずで

す。他の方法を頭ごなしに否定する立場をとることは、真摯な態度ではありません。

マンモグラフィが有効、エコーが有効という、その議論だけに終始してしまうことで、若い女性たちが戸惑い、検診自体を受けなくなる危険性があることが、最も恐れるべきことだと思います。検診の有用性議論の決着を待つ前に、救われる命があるのならば、救いたい、そういう純粋な気持ちで取り組んでおられるキャラバンであることを実感した次第です。

なお、お送りいただきました「添付資料：要望の根拠について」の「7. 若年性乳がん患者のためにできること」の項目で、「罹患リスクが高いとされる家族性乳がんの研究、有効な治療方法の開発（略）ならびに患者の治療生活・社会復帰を支える活動」を行うよう提案をいただきましたが、私どもは、2009年7月に今後のがん研究に役立てていただくため、「余命1ヶ月の花嫁」に関連した事業の収益から1500万円を財団法人がん研究振興財団へ寄付し、この寄付金を基に、若年性乳がん研究への助成が始まっています。

ほかにも、乳がんに関するシンポジウムを開催するなどしており、こうした活動すべてが、当キャラバンの活動であることもご理解いただければと思います。

◆今回のご指摘について

今回のご指摘に関しましては、私どもの進めてきた活動に対する貴重なご助言として耳を傾けたいと思います。今後の情報提供においてはこうした考え方やご意見があることもきちんと伝えて参りたいと考えております。

その一方で、私どもの取り組みを全否定するような記事が新聞・雑誌等に掲載されたことについては非常に残念に感じます。自己触診を含めあらゆる検診の意義を否定する要望書の内容に対しては、実際に乳がんの診療現場にいる複数の専門医から疑問の声も寄せられています。要望書の中味を読んだ20代、30代の女性から「では、一体どうしたらよいのか？」という、とまどいの声が私どもに寄せられています。

検診には、がん発見につながる可能性があるというメリットとともに、様々なデメリットがありますが、そうした情報を理解した上で、個人の判断の下に検査を受けたいと望む思いは、たとえ40歳未満であったとしても尊重されるべきだと私どもは考えており、このキャラバンはその趣旨に賛同いただいた方に検査の機会を提供しているものです。なお、全国には40歳未満の女性に対して検診補助を行う自治体もあり、同様の趣旨で機会を設けているものと考えております。

そもそも、私どもの検査機会の提供は、40歳以上の三千万人以上の女性に対して国の税金を使って、広く全員の受診を促すいわゆる「集団検診」とは異なります。

当キャラバンは、自らの意思で検査を希望する限られた数の女性に対し、一企業として映画のDVDの収益金などを投じ、小規模の検査機会を提供しているもので、「集団検診」とは趣旨や形態、規模が全く異なり、これを同じレベルで批判されることは不本意で、非常に残念に思います。

当キャラバンはこれまでも多くの医療関係者やピンクリボン関係者から様々なアドバイスをいただき、より良い内容にするべく少しずつ改善に取り組んできました。今回のご指摘に関しましても、謙虚に受け止め、改善すべき点は改善しながら、引き続き乳がんについての啓発に取り組んでいく所存です。

例えば、この回答書でご説明しているようなキャラバンの趣旨や内容をより詳しくホームページに掲載し、閲覧した人に誤解を招くことがないように改善したいと思います。また、ご了承いただけるのであれば、今回ご指摘頂いた内容も掲載したいと考えております。

キャラバンにおける乳がん検診は映画の DVD の収益金など限りある資金で運用しており、当初の予定通りこの秋に終了します。TBSが2年前に社内に結成したピンクリボンプロジェクトは、これまでも乳がんパネル展やシンポジウムなど、20代、30代に限らず幅広く乳がん啓発の活動を実施してまいりましたが、今後もこのプロジェクトが中心となり、引き続き様々な乳がん啓発活動に取り組んでいく所存です。今期は「乳がんの今」「乳がん患者の今」などというテーマで、乳がんを取り巻く現状について多面的な情報を提供するようなホームページを作成する予定です。

乳がんに関する多面的な情報を伝える活動を行うにあたって、引き続き、様々な医療関係者や乳がん経験者らにご指導とご協力をいただきながら取り組んで参りたいと存じます。今回のご指摘や示された根拠に関しても多面的な情報の1つであると考えておりますので、ご了承をいただいた上で一つの考え方として情報発信できれば幸いに存じます。私どもへ頂いたアドバイスに対しては、真摯に受け止め、これまでと同様に謙虚に耳を傾けていく所存です。

以上